

# 国の朗人と趣味

カジ マキ

## 恋人に告白。

今年の春もアメリカでパズル・パフォーマンスをしてきたのだが、数独(SUDOKU)が定着して、どの地でも「数独の他をお願いします」「もっと他のパズルを」の要求であった。

仲のいいアメリカ人は言う。

「マキ、なんでもいいからいつもと違うのをやってくれ。オレは『MASYU』が好きなんだけど、どうだ?」

確かにロバートの言うことはわかるが、ちょっと待ってくれ、で旅をこなしていった。

日本から仕込んでいったのは「四角に切れ」と「橋をかける」で、特に「SHIKAKU」は小学生からお年寄りまで、食いつきがはやかった。いかにルールがスマートであるかがわかる。

「HASHI」のいいところはルールにストーリーがあること。「この丸はアイランドでしてね、今、海に浮いているんですよ。あなたは橋をかけて、すべての島の人たちが行き来できるようにつなぎましょう」と説明すると子どもたちは静かになり、目が輝く。

面白い。

さて、ここに出ているクロスワードである。コイビトにコクハクである。これはアメリカの高校生200人とのライブで仕上げたものである。即興で。

おそらく「アメリカ」で「アメリカ人」が「日本語のクロスワード」を「団体」でできあげたのは世界初だろう。

舞台は「ジャパンボウル」という全米高校生の日本語選手権の集まりで。私は毎年お招



きを受けていて、その余興が「数独の父、パズルの面白さを伝える」として連続5年間、そのシャベリが定番になっていたのだが、主催者のマロットさん、リサさんも「そろそろマキさん、違うの」と言い、お互いに少し飽きていたのだった。

よし、と思いついたのがクロスワード作りである。

作り方の説明? うーむ、長くなりそう。

盤面の大きさは? うーむ。

時間は30分しかないんだよな。うーむ。

大人数では書いたり消したり? 厄介だ。

結局、与えられた道具とその場のノリで、一発勝負のパフォーマンス。

喜ぶかなあ。楽しいかなあ。できるかなあ。

そしたらあなた、手を挙げて単語を言ってくれる高校生が素晴らしかった。最初にコイビトが入り、次にコクハクを私が選択し、トモダチは多数決で決め、おおい、一貫性があるではないか。みんな大騒ぎ。ライブはいいなあ。

ところが「ク」で始まり「チ」で終わる単語でいきなり会場がシーンとなった。手が挙がらない。私も浮かばないぞ。シーン。

「ハイ、クノイチ」

わおお、私はびっくり以上のうれしさ。

その声は付き添いの先生からだったが、みんながその単語を知っての大騒ぎ。できたことで大喜び。「ニンジャ忍者」とはしゃいでいる高校生たち。

その先生にニコリTシャツを差しあげた。彼は「申し訳ありません」と言ったが、全員の拍手は鳴りやまなかった。

